

別紙 4

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

母親の内的ワーキングモデルが抑うつや子どもへの感情に及ぼす
影響—Adult Attachment Interview による縦断研究—

氏 名

高橋 靖子

論 文 内 容 の 要 旨

Bowlby (1969 黒田他訳 1976) の提唱した愛着 (アタッチメント) の概念は、半世紀以上にわたって発達・臨床心理学分野における母子保健や社会福祉, 教育といった援助サービスの領域において活用されている。

成人期における愛着は、生涯にわたって個人の対人関係の持ち方に影響を与える内的ワーキングモデル (以下, IWM), すなわち愛着対象との具体的な経験から得られる愛着対象への近接可能性や愛着対象の情緒的応答性などに関する表象モデルとして捉えられる。IWM を測定する Adult Attachment Interview (以下, AAI; Main & Goldwyn, 1984/ 1998) の開発によって、幼少期だけでなく成人期まで対象として、養育者から子どもへの世代間伝達の問題から精神病理との関連に至る幅広いテーマで多くの実証研究が蓄積されてきた。また、世代間伝達や個人内での IWM の一貫性と変容に関する研究より、個人内の様々な発達過程や対人リソースについて検討することで愛着の個人内外の連続性および不連続性のメカニズムを解明する必要性に迫られている。しかし、個人内での IWM の変容の要因や、養育者の IWM から子どもへの養育態度に至るメカニズムには未だ不明な点が多い。そして、欧米では盛んな AAI に関する研究も文化的妥当性や使用の煩雑さなどにより、日本での研究は数少ないという課題が残されている。

IWM の変容に関する検討に際して、妊娠時より形成される早期の母子の関係性に目を向け、複合的な要因に基づくモデルについての検証が求められる。特に親との辛い体験を経験していても安定型を示す“獲得安定型”において、過去の親との関係を補償する要因として、過去の代理対象、現在の夫婦関係や身近な人のソーシャルサポート、結婚や出産などのライフイベント、さらにはそれらをどのように受け取っているかという個人の内省機能を取り上げ、IWM との間にどのような相互作用を生じているのかについて包括的に検討した研究はみられない。

そこで本論文では、子どもとの本格的な相互作用の始まる出産以前に AAI によって測定された母親の IWM が、出産前後の母親自身の抑うつや子どもへの感情に及ぼす影響について、半構造化面接および質問紙による縦断的調査と事例検討を行う。

研究 1 においては、発達段階による差異、および日本における AAI の文化的妥当性について検討することを目的として、青年女子および妊婦を対象に AAI と対人認識との関連について検討を行った。AAI の分布に関して欧米の結果と比較すると、安定型が多く、とらわれ型の比率が低い傾向

がみられた。妊婦と青年女子の AAI の分布を比較すると、妊婦より青年女子で安定型が少なく愛着軽視型が多い方向性が示されたが、有意な連関はみられなかった。AAI での語りによる質的検討より、愛着軽視型の青年では結婚・出産といったライフコースの選択への躊躇が示され、一方で妊婦では安定型の妊婦を中心に現在の親からの情緒的・物理的なサポートに対する感謝が表現されることが多く、現在のサポートが妊婦の IWM に影響を与えることが推察された。青年女子では IWM と現在の対人関係についての認識との間に直接的な関連が示された一方で、妊婦ではそのような関連が認められず、様々なソーシャルネットワークとの因果関係を想定する必要性が示唆された。

研究 2 においては、IWM とその変容に関連する要因、および妊娠・産褥期における抑うつとの関連について調査することを目的とした。変容に関する要因として、研究 1 を参考に幼少期の代理対象の存在および現在の夫婦関係、ソーシャルサポートを取り上げた。不安定型や獲得安定型では代理対象の存在する割合が高く、獲得安定型では幼少時の祖父母との同居や近接の割合が高く、祖父母が代理対象となる傾向が示された。また、不安定型では血縁者以外が代理対象となる割合が高かった。そして、妊娠中期から産褥期にかけての抑うつの推移について比較したところ、継続安定型では低い抑うつ傾向が持続し、不安定型では高い抑うつ傾向が継続した。また、獲得安定型では産褥期に抑うつが高まる人の割合が多いことが示された。妊娠後期において代理対象が存在しない場合、継続安定型よりも獲得安定型で抑うつが高まった。

これらの結果より、獲得安定型の IWM に対して代理対象としての祖父母の存在が肯定的な影響を及ぼすことが示された。また、獲得安定型は不安定型ほどには一貫して高い抑うつを示さないものの、ライフイベントによって変動しやすいこと、代理対象がない場合には継続安定型より妊娠後期の抑うつが高まるといった脆弱性を持ち合わせていることが推察された。

引き続き研究 3 において、母親の IWM と幼少期の代理対象の存在、現在の夫婦関係との関連に着目し、これらの変数が子どもへの感情に及ぼす影響について検討を行った。

AAI と代理対象との関係において、獲得安定型は継続安定型より夫婦関係が良好ではない傾向が示された。そして、獲得安定型で代理対象が存在した場合に、存在しない場合よりも新生児への愛情が高かった。AAI と夫婦関係との組み合わせによる分析では、夫婦関係が良好であると胎児や新生児への愛情が高かった。胎児への愛情の関連要因を調べたところ、良好な夫婦関係、予定された妊娠、母親の拒否が関連を示した。また、新生児への愛情の関連要因を調べたところ、母親自身の抑うつ傾向を統制した上でも良好な夫婦関係や代理対象の存在が正に関連し、その一方で AAI の思考の一貫性が負の関連を示した。

これらの結果より、子どもへの愛情に対しては夫婦関係が強い影響を示し、IWM は夫婦関係を媒介として間接的な影響を示すことが推察された。しかし、IWM と代理対象との組み合わせでは、辛い被養育体験が代理対象によって補償され、子どもへの愛情に有利に働くことが示された。新生児への愛情に関して、IWM との関連は部分的にしか示されなかった一方で、ソーシャルネットワークに関する要因との関連が示された。最後に研究 2・3 から得られた結果について、幼少時の代理対象および現在の夫婦関係やソーシャルサポートが IWM と相互作用し、子

どもへの愛情に及ぼす影響としてモデルに図示した。

研究 4・5 では、母子相互作用に及ぼす子どもの個人内要因としての気質に着目した。初めに生後 6 か月の乳児を持つ母親を対象とした調査（研究 4）により、乳児の気質尺度である日本語版 RITQ の因子構造を確認し、“見知らぬ人や場所への不安”，“味覚のこだわりのなさ”，“リズムの不規則さ”，“世話のしやすさ”，“活動水準”，“注意の持続性”，そして“触覚のこだわりのなさ”の 7 因子，計 57 項目からなる短縮版を作成した。次に，AAI および妊娠中期と産褥期・産後 6 か月時に質問紙調査を行った妊婦を対象とした調査（研究 5）により，子どもの気質の認知が母親の IWM を媒介して子どもへの不安に及ぼす影響について検討した。不安定型の母親において子どもの“活動水準”が低い場合，味覚へのこだわりが強い場合，あるいは子どもの世話がしにくい場合に子どもへの不安が高くなった。その一方，安定型では子どもの気質による差異が認められなかった。この結果より，子どものむずかしい気質を認知した場合に，母親の IWM が安定型であると子どもへの不安の緩和要因として働くことが示された。

さらに，事例検討（研究 6）において，登校しぶりの子どもの問題で来談した両親の心理臨床面接および面接時に実施された AAI より，子どもの心的状態の理解についての母親の内省機能と子どもの情緒的問題の改善との関連について検討し，研究 3 で得られたモデルの当てはまりについて事例検討を行った。母親の AAI は獲得安定型と判断され，AAI での母親の語りや感想より，祖母と母親，母親と子ども間での比較が活発になされ，関係性についての新たな洞察につながるといふ内省機能の働きがうかがわれた。母親のソーシャルネットワークとして，夫婦関係が良好であること，出産や子育てを通じて実親からのサポートが増えて実親への認識が変化したことが IWM の変容と関連していることが推察された。しかし，子育て期以降の養育者自身の親とのソーシャルサポート授受のあり方については検討課題が残された。最後に，AAI を心理援助のツールとして用いることの利点と課題について，養育者自身の生育歴の理解や内省的な心理療法への反応性の視点から検討した。

総合的考察として，第一に日本における AAI を実施する妥当性について検討した。AAI の連続安定型では不安定型よりも教育水準が高く，IWM と教育歴との間に関連が見出され，また，AAI と抑うつには弱い相関関係があり，抑うつが被養育内容の想起に影響を及ぼすことがうかがわれた。しかしながら，同じように想起内容がネガティブである獲得安定型と不安定型において出産前後に示される抑うつの変移のあり方が異なっており，単に IWM が抑うつによって規定されるというよりも IWM が抑うつの変移要因として働く方向性についても推察された。

第二に，IWM 変容の要因として，幼少期の代理対象の存在，現在の夫婦関係とソーシャルサポートについて取り上げた。その結果より，情緒的な支援を与えてくれる代理対象が存在するだけで IWM の変容に結びつく訳ではなく，主要な養育者と援助者はどのような関係かという視点や，援助者との関係がどのようなプロセスを辿ったのかという時間的な推移，さらには援助の受け手である子どもがその経験をどのようにとらえて自分の成長に結びつけるかといった，様々な認識やプロセスを媒介して初めて IWM の変容につながることが考えられる。このメカニズムにより，獲得安定型では代理対象が妊娠後期の抑うつを軽減に寄与していたのに対して，

不安定型では過去の代理対象がうまく機能していないことが推察された。

第三に、獲得安定型の特徴を整理した。夫婦関係の視点より獲得安定型が依然として対人関係を含んだ環境に対する脆弱さを有する可能性があり、援助プロセスにおいて個人の過去の愛着体験が統合される過程を丁寧に聞き取る必要性を示唆するものと考えられた。獲得安定型は過去の親との関係において不幸な記憶を持っているが、過去を振り返る最中でときには抑うつ的になりながらも、代理対象との関係を活かしていた。また、ソーシャルサポートや事例検討からも現在の実親との関係について比較的良好さを保ちながら、今までの生育歴について整理・統合する様子が見えてきた。

第四に、IWM とその変容の要因が子どもへの感情に及ぼす影響について検討したところ、母親の IWM は夫婦関係や現在の夫や親との関係などのソーシャルサポートを通じて間接的に子どもへの愛情や不安に影響を及ぼすことが想定される。

本研究の限界として、主に健常な母親を対象にしておき対象者の人数が少ないこと、1 か所での調査が含まれることより、結果の一般化が限定されることを述べた。また、AAI の後方視的な測定法や他の評定尺度に関する限界についても取り上げた。

最後に本研究の臨床的意義として、子どもへの愛情が主要な養育者のみとの関係で決定づけられるというよりも、安定型、特に獲得安定型においては幼少時の年長者との情緒交流や良きパートナーの存在が肯定的な関係をもたらすことを示したことにより、被養育体験に起因する苦悩を持つ人々に対する心理的援助や子どもにとって大きな示唆をもたらすものと考えられる。